

かいづぶり中を補ひ氣をませり膏は聞えぬ耳に滴でよ かいづぶり甘く冷にて泄瀉によし
五疳の腹の下やまぬに

〔古事記 中 仲哀〕於是其忍熊王、與伊佐比宿禰共被追迫乘船浮海、歌曰、伊奢阿藝、布流玖摩賀、伊多氏、淤波受波邇、本杼理能、阿布美能宇美邇、迦豆岐勢那和、卽入海共死也。

〔古事記 中 應神〕於是天皇、任令取其大御酒盞而御歌曰、許能迦爾夜、伊豆久能迦爾、○中美本杼理能、迦豆伎伊岐豆岐志那陀由布佐佐那美遲袁、須久須久登、和賀伊麻勢婆夜、○下

〔萬葉集 雜歌〕筑前守山上臣憶良挽歌一首

〔萬葉集 十五〕屬物發思歌一首并短歌
安佐散禮婆伊毛我手爾麻久、○中安左奈藝爾布奈氏乎世牟登、船人毛鹿子毛許惠欲妣柔保等里能奈豆左比由氣婆、○下

〔萬葉集 二十〕三月○天平勝寶八歲、七日於河內國伎人鄉馬史國人之家宴歌三首
爾保杼里乃於吉奈我河波半多延奴等母伎美爾可多良武己等都奇米也母、

右一首、主人散位寮散位馬史國人、

〔冠辭考 七〕にほどりの

かづしかわせ

なづさひゆけばぬ

鶴鷗の水底に入て、さてうかみ出ては長く息つぎて鳴故に、息の長き意にて、息長川につゝけ
しなるべし、

〔古今和歌六帖 三〕鴟

逢ことのなきさによする鴟鳥のうきにゑづみて物を社思へ